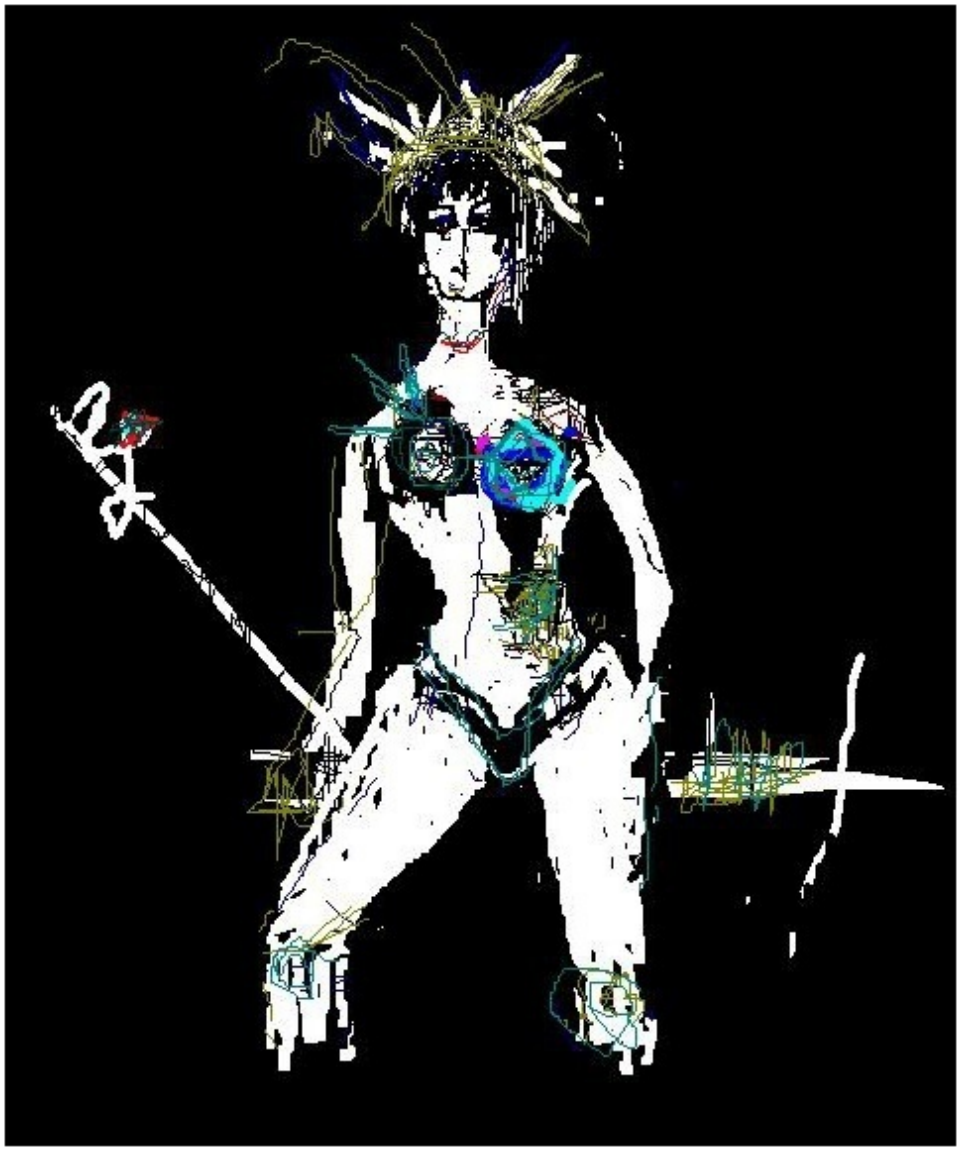
人間ポンプの女



Grasshouse

　最後の人間ポンプの女は恐ろしくインテリだった。青いカーテンの垂らされた大学の研究室で、野木啓子はコンピュータを前にして一日中数字や図形とにらめっこをしていたのである。
　何か先端的な冷凍技術に関する新しい実験に携わっていたということで、白い霜に覆われた太い曲がりくねった管が交錯する薄暗い実験室では、さまざまな計測器を見ながらメガネの奥で冷やかな視線を走らせていた。
　陽あたりのいい丘陵地帯の大学構内で、彼女の知人は同性も異性も限られていた。
　もっとも野木啓子自身が友人を必要としなかったようだ。どちらかといえば彼女は人間嫌いといえたかも知れない。とくに同性の友人はみな感傷的で、まどろっこしくて、お話にならないような気がした。

　彼女が行っていたのは、何でもマイナス数百度というような自然では考えられないほどの低温の世界に関する研究らしい。
　パソコンでシミュレーションを行ったり、膨大な書類を作成したり、教授たちにお茶を入れたりしているうちに、彼女はからだに変調をきたした。
　まず白い紙を見るのに恐怖を覚えた。紙片が刃物のように鋭く見えて、指を切り裂きそうに思われた。いったんそんな不安を覚えると、奇妙なことにスイスイと紙で指の腹を切るのであった。ペンの先端を怖いと思った日から、ちょくちょく手の甲や二の腕を尖った先でつつくのであった。
　目の前にはいつもいろんな色のディスプレイが浮かんでちかちかするし、壁にも緑色の文字が虫のように行列を作って走っていくし、深夜の部屋で開く三面鏡の中まで青いグラフの線が浮かびあがる始末だった。複雑な数式が彼女の胸や脇の下に小さな金属製の人工臓器のように食い込んで、ちくちく痛みだすのであった。
　ストレスで神経がやられてるだけなんだから、と彼女は冷静に溜息をついた。こんなことは何でもないことなのだ。ただ、他のことに、例えば少しは温度の高い世界に興味を持てばよいのだから。数字や計測や実験から心を自由にしてくれる世界に、少しのあいだ遊べば直るに決まっているのよ。
　読書好きの彼女は哲学に走った。
　プラトンからカント、ニーチェ、フッサール、ウィットゲンシュタインからフーコーまで、彼らの代表作を読破した。しかしこれは結局、思考のエンターティメントであって、ほんとうのことは何もわかっていやしないのだと、彼女は決めつけた。いったい彼らの中の誰が、自分たちの思考がどこからやってくるのか答えられるだろうかと、彼女は勝ち誇ったように思い、そして不意に寂しくなった。「私の意識」と「私のピンク色の乳首」との関係や、薬指が動くことと脳の内部を走る信号のことを考えているうち、ますます憂鬱は深くなった。
　そして自分の仕事を振り返り、こんなことを研究してもその技術は結局、どこかの阿呆な企業のお偉方が、料亭でお互いを懐石料理で接待しあったり、愛人を愛撫するための高級マンションを買うお金に化けてしまうだけなんだわ、と彼女は思った。
　そう思ったとたん、それまで正確に噛みあっていた世界の透明な歯車が、不意に上下左右に離

れて虚無の風が彼女の頬に吹きつけた。
　啓子は最初、自分の仕事を信じているかのようにふるまおうと思った。教授は慈愛に満ちた上品な白髪のお年寄りで、誕生日にネクタイピンなどをプレゼントすると子供のように喜んでくれ、母性本能すらくすぐられる。
　その弟子たちだって男としてはつまらないけれども、知的だし彼女にはとても優しかった。とはいえ、どの男も野木啓子に心奪われたり、プロポーズしたりすることはなかった。もっと退屈でありきたりな女子大生たち（と彼女は勝手に思っているのであるが）には声をかけるくせに、彼らはいっこうに彼女の奥深い魅力をわかろうとはしなかったのだ。そのため、喫茶店で友人と会うたびに「最近、なかなかいい男がいないじゃない」とうそぶくことが癖になった。
　もっとも彼女自身、何がいい男かわからなかったのだけれども。

　周囲の人は良い人ばかりなのに、決定的なことは、この全体に意味がないということであった。少なくとも、彼女自身のやわらかな桃色の心臓とは何のかかわりもないように思われた。日常生活を成立させている世界の透明な歯車は、ますます分離していった。
　そしていつしか彼女にとって研究室は、明るい無意味の地獄となった。
　不器用な野木啓子を娘のように思っている老教授は心配して、たまには旅行でも行ったらどうかとか、彼氏はいないのかとか、どこか内蔵でも悪いのかととか、目を伏せて相手を気づかうような静かな口調でいったけれど、彼女は顔をあげてとまどったように笑って見せるだけだった。
　ところがある日、目が醒めてみるとベッドの中でどうしてもからだが動かなくなり、筋肉がスルメイカのように硬直してしまったように感じた。仕方なくそのままの姿勢で何とか手だけを伸ばし、大学に電話をかけた。
「思うところがあって、しばらく休ませていただきます」
　私に欠けているのは具体的なものなんだだわ、と啓子は思った。イメージ豊かなもの、色彩鮮やかなもの、一般の若い女性が好むもの、例えばファッションとかフランス料理とかポルシェに乗ったハンサムな男とか。
　けれどもよく考えてみると、どれひとつとっても彼女のやわらかな桃色の心臓とは無縁なのであった。彼女の心臓や脊髄が渇望しているものは、別のものであった。
　意味、そう、まばゆい白銀色に輝くような意味が欲しい、と彼女は思った。
「大学にはもう魅力を感じない」
　ということを婉曲な表現で手紙に書いて、彼女は古巣を後にした。あの穏やかな表情をした教授は呆然とし、おたおたと無意味に階段を上り下りした。大学を辞めたとき、彼女はもう二十九になっていた。
　麦藁帽子をかぶった一人旅で、城下町や堀や水鳥のいる池の前に佇み、溜息をついた。　私の人生はどこがどうつながって、どこに結びついていくのだろう。あてもなく蝉の鳴く陰の深い小道を歩き、埃っぽい石塀沿いの道を歩いた。
　ある日、東北の田舎の縁日を青いテントで巡業していた時代遅れの見世物小屋に飛び込んで、からだが慄えるような体験をした。

見世物小屋の女は、半裸になって片方の鼻の中に白い紐を通し、もう片方の鼻から、つるりつるりと抜き出しているのだった。その乳房はぺったりとへこみ、乳首は深く黒ずんでいた。引きつったような細い目はいかにも愚かしく、彼女の人生の中で一度も見たことのないようなものであったが、そこには恐ろしい残酷な「意味」が含まれているように思われた。

蛇の頭をかじる女が出てきたとき、彼女のからだの慄えはとまらなくなった。Ｓ字型にもがいてからだをうねらせるシマヘビの腹と、発狂したような色の白い初老の女。原始的な暗い衝動に満ちた音楽と、テントの闇に金色の輪を描く蝋燭の焔。糸切り歯はカリカリと光沢のある蛇の頭部に食い込み、黄色い薄い汁をたらした。女はやがて音楽の高鳴る中、前歯で首をきっちりと食い切って大きな木の実ほどの蛇の頭をポッと吐いた。
褐色の首は床板の上に硬い音をたてて転がっていった。失心せんばかりの戦慄と感動の中で、野木啓子は楽屋を訪ねた。その小屋は『河村一座』と名乗って、極彩色の大漁旗のようなものを掲げていた。奥でラーメンを啜っていた座長に、おずおずと何日間か楽屋を見学していいかということを伝えた。
テントの外では夏草が匂い、蝉が激しく鳴いていた。
これが彼女の芸人としてのきっかけだった。

はじめはほったらかしになっている木箱にかじりつき、経理と宣伝を担当していたが、三週間ほどして座長に、
「私、こういう自由な生き方に、昔からある種の憧れを感じていたんです」
といって芸人への決意の堅いことを表明した。
彼女の話はきわめて論理的であり、一種の文明批評があり、感動的ですらあった。
河村座長はもうそろそろこんな時代遅れの商売をやめようと迷っていた矢先だったが、彼女の雄弁な話を聞いているうち、自分のやってきたことが尊い社会的事業のように思われてきて、不覚にも涙ぐんでしまった。
女というものは皆、色目を使って金を狙ってくるか、憎々しげに彼を罵倒してくるかのどちらかの人種に決まっていると思いこんでいた座長は、彼女に当惑してしまい、口をへの字にして頷くだけであった。彼女を例外的に「野木さん」と、さんづけて呼ぶことにして受け入れた。
その一座は、軽演劇や曲芸や手品や見世物をごったにした、とくにポリシーもない小屋であった。客の雰囲気にあわせて、ストリップまがいのことすらやった。天性の勘の良さで彼女は手品や水芸などを次々と習得し、その芸のポイントやコツをノートに書きとめ、様々な角度から分析するのを忘れなかった。技術的な問題点を明らかにして次のステップへと進んでゆく。
「こういうプロセスは、すべて実験と同じ手順なんだわ」
芸人たちは彼女を尊敬しはしたが、愛しはしなかった。いや微かに憎んですらいた。
なぜなら芸の習得の方法が世間知らずの学生の勉強のように見えたからである。
しかも彼女が仲間に溶け込もうとして無理に飛ばす駄ジャレときたら、最悪だった。
彼女がどんなに物知りであろうと、その駄ジャレだけで間のぬけた女に見えるのだった。とはいえ、彼女はつねに陽気に楽しげに振る舞っていた。

結局彼女の芸は『人間ポンプ』に落ち着いた。
おなかの中に金魚や豆電球やピンポンボールを飲み込んだりする芸である。

練習熱心なためか、しだいに彼女の肉体は青白い蝋人形のようなものに変化していった。「どうせやるなら、一番を目ざさなきゃ」
消しゴムやビー玉のような小さなものからはじめて、しだいに複雑な形をした大きなもの、鋭い危険なものへと進んでいった。赤や青の透明なビー玉をひとつづつ飲み込んでゆくと、カチリと胃袋の底で当たる。もうひとつ、カチリ。もうふたつ、カチリ、カチリ。
冷たく秘密めいたかわいい音。十個ほどたまってからからだを上下に震わせると、カチカチカチ、ジャラリと、魅惑的な音が響く。
闇の中でするすると豆電球を飲み込むと、蛍でもいるように胃のまわりがぼんやりと薄い金色に明るく染まった。
生きのいい金魚が初めてビーカーの中の冷たい水とともにからだの中に入ってきたときは、その微妙な動きに恍惚となった。
金魚は中でぴちぴちと跳びはね、胃壁をつつき、エロティックに向きを変えた。彼女の求めていた「具体的なもの」がそこにあった。
「生きているのね。生きて、いるのね」
啓子はいま味わっている秘密の快感を悟られまいと、目を白黒させた。

彼女は楽屋裏でも超然として英語のペーパーバックなどを開いていたりするので、芸人仲間では煙たがられていた。日本酒もビールも飲まなかったが、焼酎を無理に飲ませると真剣な顔をして何杯でも飲んだ。それはまるで苦手な学科を「克服」する女子学生の努力を思わせた。
楽屋では浮いていたものの、彼女の方は小屋のすべてを情熱的に愛していた。
なぜなら、ここにこそ本物の人生、極めつけの人生があると、彼女は勝手に勘違いをしていたからである。かつての研究室での生活は、虚偽であったのだ。
そしてその愛を仲間たちに押しつけた。紐女はうつろな引き釣ったような目で啓子の演説を聞いていたし、蛇女は憎々しげな光を帯びた目で幕の陰から彼女を伺った。
感情の押し売りはやがて家族にまでおよんだ。
父親は一人娘のお見合いをひそかに進めていたが、娘の断固とした拒絶を食らって面くらった。将来有望な若い医者との縁を蹴って『ほんとうの人生』の方を取るというのである。真相を知って両親は愕然とした。
子供の頃から頭のよかった娘が、芸人になる訓練をしているなんて。
何度か電話で激しいやりとりが続いた。
「はやく目を覚ましなさい」と父はいい、
「私の育て方が間違っていたの、啓子」と母は泣いた。
「その座長というのが怪しい。世間知らずのお前は、騙されているんだ」と父は受話器に向かって怒鳴り、「あの子も思い詰めるたちだから」とその脇で、母はハンケチで目を覆った。
娘は冷静に応え、理路整然と反論し、ほほえみさえした。彼女にとっては、すべて予想のつく

反応だったからである。

『お父さん。昔からそうでしたが、あなたの考え方は狭くて間違っていると思います』　一週間後、娘はきっぱりと手紙に書いた。
『職業に貴賤はありません。私はここで、自己の思いがけない面を知り、潜在的なものを表現する価値を見いだしました。ここには素晴らしい人たちと、本物の自由があります。思えば私の二十九年間の人生は、生の意味を求める旅だったのではないでしょうか。学校も、教授たちも、私の内側の問題には答を持っていませんでした。いま、毎日が充実した「意味」で輝いています。いままでの私は、単なる与えられた役割を演じる空虚な蝉の抜殻にすぎませんでした。私は内側から泉のように湧いてくる衝動を発見したのです。もう、あの空虚な、明るい無意味の地獄に戻るわけにはいきません。人からどう思われようが、私はかまいません。一度、私の芸を見にきてください』

　父は手紙を置いて放心状態になった。指から何度もタバコの灰が落ちた。娘の決心は本物であった。しかし山陰地方の小都市のちょっとした名士である父は、地方巡業の見世物小屋に大事な娘をそのまま手渡すつもりはなかった。
　それは断じて許してはならなかった。父親は悩み、絶望し、無口になった。母親は何度か寝込んだ。

＊

　人間ポンプの女は、見かけは知的な表情をした陸上競技の選手といった感じで、やや神経質な印象を与えていた。
　演技中もメタルフレームのメガネをかけているせいかも知れない。
　外人のような肌には青紫の血管が浮き、ややO脚気味の長い太ももには特に顕著にそれが見えた。初期は、いつも舞台では自分で作った奇妙な衣装で登場し、それがかなりの評判を呼んだ。いや、ほんとうを言えばそれはひとりよがりのデザインへの軽い揶揄を含んだ笑いであった。というのも、大きなゴミ袋にハサミを入れただけの衣装や、アサガオの青い花をつなげたもの、銀色の鎖を幾重にも重ねたもの、そんな「前衛的」なコスチュームで芸を披露したからである。
　このアバンギャルドな衣装は、度重なるブーイングのため座長が注意してようやくスポーティーな細い水着に落ち着くことになった。
　それは胃袋に入れた豆電球が見えるようにカッティングされており、ひどく滑稽かつ恥ずかしい恰好で、客席からも尖った貧しい乳首や、唐突にふくらんだ恥丘や大きく割れた性器のふくらみなどがうががえた。
　頭の中だけの美と理想の追究者たる彼女は、しかしそんなことは気にもとめず、無駄毛の処理もいいかげんだった。
『既成概念を打ち破る私の芸術』
　彼女は自分の芸をそう呼ぶことを好んだ。

　つまりコンセプチュアルアートの一種と解釈しているようなのである。しかしそんな便利な既成概念がいまだに存在しているかどうかは、疑問であった。
　吊された裸電球が心細い光を放っている楽屋の片隅で、彼女はカマドウマのように長い足を開き、かがむようにして陰毛を剃ったので、火吹き男や弾丸男が、幕の下から息を殺して覗き見した。
「なんでも大学院を出ているそうだ」
「恐ろしい女だそうだ」
　ふたりは蒼白い月の光の跳ねる幕の影で、呼吸を荒くした。
　やがて、デビュー後一年もしない間に、客から花束まで寄せられるようになった。一座のスターになりつつあった人間ポンプの女には、付人らしい者がついた。
　陰毛を剃る繊細な作業は、ノンさんという昔からここにいる得体の知れない太った男が喜んで担当した。
　ノンさんは眉がほとんどなくて、首と肩と頭の区別が曖昧で、全体的につるりとしていた。まるで肌色のアシカだった。この年齢不祥の人物は、山に分け入り、蛇をごっそり採集してくるのが仕事だった。彼の背負ってきた大きなゆがんだ籠の中でごそごそと蠢く蛇の中から、生きのいいヤツを物色して、蛇女がカリリと噛むのである。
「因果な商売だんベイ」と彼は、ときおり何かから目覚めたような顔で溜息をつくのであった。寒い日はいつも大きな白いパンツだけをはいて、外の冷たい水で洗濯や拭き掃除などをやっていた。
「俺ァよ、ロクな死に方しなかんベィ。夜、夢の中で百匹もの蝮に、首んとこ噛まれるんだァ」
　そのくせノンさんは、山林の中のどんな小さなお地蔵さんにも古ぼけた道祖神にも両手を合わせる癖があった。
　そしてどういうわけか人間ポンプの女のあそこに剃刀を当てるときも、目を閉じて両手を合わせぶつぶつとつぶやくのだった。
「まアったく、ここからすべてが始まるんだから……たいしたもんだねェ」
　ある日、ノンさんが例によって合掌してから剃刀を当てようとすると、人間ポンプの女は両手でノンさんの手を優しく挟んだ。
　そして何かせっぱつまった訴えるような目をして、つるつるの頭を抱きしめた。熱い息が耳にかかった。両足を、彼の太い胴体にまきつけた。
　後頭部の厚い皺を、丁寧に丁寧に愛撫されると、彼は目のまわりが真っ白になった。
「スターが、スターがそんなことしちゃ……」
　けれどもノンさんもいつかはこんなことになりそうだと予感していたので、めまいのするような感覚の中で、前屈みになった。
　人間ポンプの女の貧しい胸や、無駄のない腹筋や、筋の張った白い首が、不思議にいとおしく思われた。しかしこんなことが座長に知れたら、半殺しにされたあげく追い出されるのは目に見えていた。
　人間ポンプの女の胃には、わずかな水と金魚が入っていた。
　動くたびにポチャポチャ鳴った。金魚は急な体温の上昇でしきりにもがいた。

「まあ凄い、上と下で、二匹もお魚が暴れてる」
　お魚といわれてますますノンさんは興奮し、ついにお尻を堅くして、両腕をふんばり、顎を上げた。人間ポンプの女は、ホォッと澄んだ声をあげると、テントの奥に向かって、赤い金魚を吐き出した。金魚は鱗をきらめかせながら闇の向こうに消えていった。
　と同時に、隣のテントでひそひそ声が聞こえたので、ノンさんは汚れたシーツの上に滲んでいる赤い金魚型の徴も、慌てて隠さなければならなかった。

「素晴らしい人たち」
　と人間ポンプの女は日記に書きつけた。
「人間のほんとうの優しさと哀しみを知っている人たち」
　ほんとうの人生、ほんとうの自由。彼女は今度こそそれを見つけたと信じ込んでいた。　いろいろ誤った道を歩いてきたが、そういう錯誤を糧にして本物の世界を見つけたのだ、自分ははじめからそういう人生を約束されていたのだと、彼女は思い込もうとしていた。
　しかし小屋の中では彼女はますます浮いていった。
「何か勘違いしてるんじゃないの」
「顔を見るのもムカムカするぜ」
「えらそうな顔して、結局アレしか考えていないのさ」
「ノンさんを離さないって話じゃないの」
「なによ、あの貧弱なオッパイ」
「しょせんあんなの、人前に出せるからだじゃないよ」
「温泉芸者だってもう少しマシさ」
　そんな声が遠回しに耳に入ってきても、彼女はほほえみ続けた。
　寒空の下で小屋のテントをたたむ作業や、日照りの中トラックで畦道同然の道を進んでゆくとき、彼女は不意に涙ぐんだ。
　そして、父や母が自分の芸を見にきてくれないことを悲しんだ。
　彼女はさらに自分の芸のコンセプトを練り上げていった。
　あるときは『無機物とのアナーキーな闘争』と呼んだ。また『私は自分自身が有機物であることを恥じている』ともいった。
　二三の写真週刊誌が、面白半分に嘲笑的な文体で取り上げた。
　相変わらずドサ廻りだったが、客はしだいに増えていった。座長は、まんざらでもなかった。

　ある日彼女は、白熱電球の下で帳簿をひっくりかえしている座長の前にいった。
「座長。わたしたちの世界をもっと近代的にしなければなりません」
「キ、キンダイテキ？」
　彼女の顔は輝いていた。
「そうです。まず経費に無駄が多すぎるということ。不明確な出費が多く、また給料の遅配がしばしばあること。これではせっかく希望に燃えてこの道に入ってきた若い才能も、失望させかねません。また子供のいる芸人には、それなりの配慮もされるべきでしょう。小屋のまわりで裸で

ミミズをつかんで遊んでいるというのでは、あまり感心できません」
「あ、あ、そうね。そうそう」
「今後一年で、抜本的改革がなされなければ、『河村一座』はおしまいです」
　こうして朝は全員六時起床となり、形式的な朝礼が行われ、座長はそのネタを探すため朝日新聞を読むようになり、子供たちは育児所のような赤い小さなテントに押し込められるようになった。

　しかし彼女の野心と計画は、それだけではすまなかった。
「どうも私の芸には構築というものがないわ。いまどき金魚や豆電球を飲み込んだからって、何だというの？」
　ノートに様々な図形を描きながら彼女はつぶやいた。
「もっと現代的な発想、ダイナミックなスペクタクル性がないと、しょせん映画やロックコンサートに勝てないんだわ」
　風邪をひいたのをよいことに、彼女は数日の間以前から頭の片隅で温めていたアィディアを具体的に煮詰めてみた。
　熱っぽい布団の中で、数種類の実際的なヒントが一点に凝縮し、鋭い方向性をもって形になりつつあった。蜂蜜と牛乳を温めた独特の飲物を枕元に置いて、腹ばいになって数字や記号をいじりまわした。はじめはからだが熱っぽかったが後には頭が熱病のように曇っていった。小屋の闇の中で目を開けていると、うなされるような気分の中で、アイディアが魑魅魍魎のように青黒く宙にからみあうのだった。
　風邪が直りかけると、下唇を噛みしめながら、彼女はテントの中をせかせかと動きまわった。
　　そんなときはノンさんが話しかけても、ひさしぶりに毛を剃ってやるといっても、口をきいてくれなかった。
「これで何とかなるはずだわ。よしっ、これでいける」と彼女はぱちんと手を打った。　『野木啓子のスーパー人間ポンプ　—恐怖の人体イルミネーション—』
　これが彼女の企画しているアィディアであった。
　危険きわまりないパフォーマンスであった。サーチライトを改良した数百ワットのとてつもない電球を飲み込むのである。
　しかし膨大な熱を冷却するために、彼女の胃の内壁を薬でコーティングし、同時に絶えず冷水を送りこまなければならない。
　そのために長いチューブが二本、唇の両端から出ることになり、あたかも動脈と静脈のように、凍りつくような冷水と、内部で熱せられた温水とが交互に出し入れされることとなる。この流入と流出は、時間の推移により微妙な量の変化があるために、機械を使って自動的に行うことができず、当然気心の知れたスタッフが行うこととなる。
　人間ポンプの女は、自分の体温と脈拍を計り冷静に数種類のグラフと解剖図めいた人体図を何枚も描き上げた。
「これまでになかった事をやらなければ、新しい創造とはいえないわ」

　彼女は自分自身を励ますように裸電球の下でつぶやいた。わたしは自分の芸を通してファウスト博士のように世界の根底を極めてやるんだから、前人未踏の領域に踏み込んでやるんだから、と誰にいうともなく彼女は呪文のようにつぶやいた。

「ケ、ケイコ。なんだか、俺は、恐ろしいことのような気がするんだナァ」
　腫物に触るようにノンさんがいった。
「それはそうよ。だって、初めての試みは、普通人にはすぐには受け入れられないものよ」
「でも何だか、親からもらったからだを、そんなことに使っていいのかどうかと」
「それが、芸人でしょ」
「そりゃあ、そうだけんど」
「それに、今までの芸じゃ、知的に高度になった新しい観客の心をとらえることができないの。わたしたちは、ロックコンサートや、企業のイベント以上のインパクトを与えなくてはならないのよ」
「そ、そういうものかねェ」
　しかしこの企画は人間ポンプであるどころか、人体電球であり、全身の骨格を透かして輝かせようという危険な大技である。もちろん、こんなことをやった芸人は誰もいない。しかし「意味」というものに憑かれた彼女は、すでに座長に説明するための企画書まで書き始めていた。

　東北のある地方都市の城跡公園に小屋はテントを張った。芝生の陽あたりのいい柔らかな斜面だった。
　メンバー全員で一軒一軒、ポストにチラシを入れたので、前評判は上々だった。
　しかし、初日はある有名少女歌手が市の一日駅長になる日だったので、かなりの客はそっちへ持っていかれてしまった。そのタレントといったら、まだデビューして間もないのに早くもニキビ面の中高生のグルーピーがつき、連中は東京からこの街まで学校を休んで追いかけてきているようであった。
　その日彼女は駅員の帽子を被って、人差し指を立て、プラットホームで愛らしく新曲の歌を披露してみせた。彼女の歌は最低でときどき歌詞すら忘れてしまうし、演技力といえば小学校の学芸会並であった。しかしそこがいいと言うファンもおり、きっとそこがいいと言いだす馬鹿なファンも出てくるに違いないと読んだプロダクションのマネージャーもいた。
　笑顔がたまらなくかわいらしく、ジュースの宣伝のためにはじめて着た黄色い水着のポスターは、貼っても貼っても店頭から盗まれる騒ぎであった。皆、この少女の何やら天使めいた表情を見ていると、ほっとするところがあるというのだ。
　新聞記者のすべてと、街のミニコミ誌のほとんどがそちらの取材にに行ってしまった。その事実を知るとプライドの高い人間ポンプの女の顔は、凍った。
「なによ、あんな子供のどこがいいの。ロクに芸なんてないくせに。本物が評価されない時代なんだわ」
「しかし、あの子はテレビに出てるし、だいいちかわいいし」
　人間ポンプの女の顔は硬直した。彼女はいままで、お世辞まじりに知的だとか美人だとかいわ

れたことはあっても、「かわいい」といわれたことは一度もなかったのである。
　その形容詞を憎むあまり、そんな言葉を発する男を反射的にすべて軽蔑するまでになっていた。
「愚鈍よ、あの顔は。それにテレビが何だというの。みんな芸というものがわかってないんだわ」
「レコードだって出してるし」
「馬鹿ね、今はＣＤっていうの。いいわ、いまに見返してやるから」
「ケ、ケイコ。ライバルにする相手が違うよ、相手が」
「わかる人には、わかるの。そうじゃなきゃ、わざわざ私がこの世界に飛び込んだ意味がないわ」
　ノンさんはそれ以上言い争うのはやめにした。というのも、目の端の方をちろちろと緑色の小蛇がしっぽを振っていたからである。殺した蛇どもに祟られているのか、最近幻覚がひどくなり、会話の途中でもこうして出てきては、彼の指ににょろりと巻きついたりして悪さをするようになっていたのであった。

　当日、『河村一座』のテントの入りは六割強といった状態であった。しかしながら、どことなく奇妙な暗い熱気を感じさせるものがあり、彼女としては満足であった。
　まず前座として、火吹き男や蛇女が、いつもの通り渋い芸を披露した。玉乗りや綱渡りといった安心できる芸で間をおいた後、真打の野木啓子の登場となった。
　照明があたると闇の底から椅子に深く身を沈めた野木啓子の不吉な姿が青白く浮かびあがった。口のまわりに金属の猿轡のようなものがつけられ、そこからは黒い二本のチューブをはじめとして幾つかの見慣れない装置が続いていた。
　銀色のパイプが客席の方まで張り出して、照明がそのあたりを照らしだすと、陰鬱な工場のように見えた。
　ドライアイスが白くおごそかに客席に流れ込んでいくとともに、舞台の左右のパイプから、突如膨大な蒸気が噴出した。同時にヒトラーの演説めいたドイツ語の怒号のようなテープが流された。
　人間ポンプの女は黒い革紐で身を包んでいる以外はほとんど全裸であった。
　両耳からは青緑色のカミソリが下がり、ふたつの乳首には金色のピアスが垂れ、性器のほんの周辺部だけを貞操帯めいた奇怪な金具が覆っていた。
　陰毛ははみ出さないようにノンさんが愛情を込めてきっちりと剃ってあげたので、最前列で見ると内股には十代の少年の幼いヒゲ剃りあとのような薄い影が見えた。
　それは、観客席でおせんべいを食べている家族連れの田舎者を小馬鹿にしたような、犯罪的な猥褻さであった。その挑発的なスタイルは、白衣を着た研究室の助手への永遠の決別であり、自分の中のあらゆるクソ真面目さへの嘲笑であった。
「ブルジョワの、度肝をぬいてやるの」
　しかしノンさんは、そのブルジョワなるものがどこに隠れ棲んでいるのか見当がつかなかった。

彼女はこれらの装置—もちろん半分は形だけのはったりだったとはいえ—を購入し、改良するのに自分の貯金をおろし、さらに借金までしたのである。
電気椅子めいた装置の背後でＳＭふうのファッションに身を包んだ死刑執行人のような男は、ノンさんであった。
まず人間ポンプの女は特種な電球を飲み込んだ。そして口に猿轡のような装置をくわえ、少しずつ温水を流しこんでいった。
それとともに照明は薄暗くなり、ドライアイスの白い煙はいっそう大量に客席の隙間を幾筋かの川のように這い進んでいった。
赤んぼうが恐怖で泣き出し、場内にはやがてバルトークの怪しい掻きむしるようなヴァイオリンの音が響きわたった。
温水から冷水に切り替えられ、太いチューブから胃袋内部の水が放出されはじめた。
水は口から漏れ、からだの表面をなめらかに滑り、床を濡らし金色に反射した。
しばらくすると、電気椅子のようなものが彼女を乗せたままゆっくりと上昇した。熱水と冷水はより大量に出し入れされ、胃の内部で電球が鋭く輝き始めた。
闇の中で彼女のからだは半透明のクラゲのようになり、骨格や内蔵が鮮やかに浮かびあがった。肋骨は光を透かせ、火星の運河のような模様をテントの内部に反映させた。肺や膵臓や肝臓や腸は、それぞれ不思議な光に染まった雲のように夢幻的な映像で重なりあった。
空中に引き上げられたチューブだらけの奇怪な椅子に座った野木啓子は、目を閉じ、顔をあげ、もはや芸人を超えて何か聖なる存在として恍惚としていた。
テントの中の闇は紫色に深くなり、彼女の内蔵の表面を走る毛細血管の一本一本まで、美しい線画として、観客のシャツや手の甲や赤んぼうの丸い頬に投影された。
未知の邪神に捧げられたいけにえのようなその姿。
それは、『人体イルミネーション』の完成であった。

ノンさんは普段着慣れないレザーファッションと物凄い蒸気の中で、ふうふういいながら作業をしていた。複雑な装置のボタンやレバーをつまみ、時間表に合わせて操作するのである。まったく時代に合わせるということは何ときつい仕事であろうか。
ぼんやりとしていると何かぬれた細いものが床を横切り、チューブをカリリと噛むのが見えた。
誰にも言えなかったが、最近しばしばを蛇の幻覚を見るようになってきた。
殺してきた無数の蛇に、とうとう祟られはじめたのだと彼は思った。
桃色の蛇や青い蛇が、夢の中だけではなくて、昼間掃除していても、モップに巻きついてきたり、彼の背中にもぐりこもうとしたりするのである。
座長は奥の柱の脇で腕を組み、無言で見守っていた。この出し物を当てて何とか今までの赤字を取り返さなければならなかった。
幸い、客の反応は上々だった。
ノンさんが表を見ると、パフォーマンスが始まってから四分後には赤いレバーを回さなければ

ならないのに、そのレバーには小蛇が巻きつき、彼が手をのばそうとすると首を伸ばしてカリリッと噛むのであった。
「しっ、しっ。おめーは、あっちいってろ」
　ノンさんが手で払おうとした途端、右側の青いレバーを押してしまった。それは冷水の量を調節するレバーで、これが彼女の胃を熱から守っているものなのである。
　あわてたノンさんは反対に回し、今度は少し戻し過ぎたような気がした。チューブがぐんと太くなり、より大量の冷水が上っていくように思われた。あの冷水を打ち消すためには、こちらのレバーを押して熱水の量を増やさなければならない。そうすれば、プラスマイナス０になるのだ、とノンさんは素早く考え、赤の方を大きく回した。
　ブルンとチューブが唸って、ばたばたともがきながら大量の熱水が椅子めがけて駆け昇っていった。
　蒸気がもうもうと立ちのぼり、椅子の周囲を瀧のように覆った。テントからぼたぼたと濁った水がしたたり落ちた。照明が落ち、蒸気だけが何者かへの怒りのように噴出していた。
　闇の向こうで聞いたこともないような悲鳴が聞こえた。
　人々は立ち上がり、騒然とした。
　椅子は落ち、テントも端の方からゆっくりと崩れていった。柱と柱が宙でぶつかりあい、汚い褐色の幕の向こうに青空が覗いた。
　綱がずるずると引きずられるように垂れ下がり、女性や子供の声、男たちの罵声があたりに響いた。崩れかけて山脈のような形になったテントの闇の底で、ホースが大きく脈打つように熱水と冷水を吐き出した。
　ホースはじっとしておらず、上を向いたり横を向いたりして、人々の悲鳴を楽しんでいた。数人の負傷者が出たようである。
　惨劇は数分間続いた。

　事故は報道されものの、より大きな汚職事件の影に隠れて忘れていった。研究室の老教授は彼女の死を知り、これは変形した自殺ではないのかと心を痛め、常用している睡眠薬の量を増やした。
　あの女はいったい何だったのだろうと芸人仲間は溜息をついた。もう少し温かい言葉をかけてやるべきだったのかも知れない。いやあいつ自身が勝手な幻想をいだいてこんなところへ来たのだから、迷惑をかけられたのは俺達の方なんだ―。
　そんなことをぶつぶついいながら火吹き男はあいかわらず味覚の死んでしまった舌でまずい食事をし、蛇女はうんざりしながら蛇を首にまきつけた。
　あれから客の反応は冷やかになった。
　それにいまの時代、もう誰も見世物小屋などに関心を持ってはいないようだった。ノンさんは町にノコギリを買ってくるといったきり戻ってこない。
　夏の終わりの田舎道、白い埃のもうもうと舞う中を、人間ポンプの女のいない一座のトラックは走っていった。（了）